二〇一八年七月二四日　開催

メディアと音楽にこめる沖縄

――民が織りなす文化芸術・ことば・歴史の調べ

宮里英克

■講演者……宮里英克（クマノミデザイン代表）
■司　会……豊田　聡（本学国際コミュニケーション学科准教授）

（宮里氏、唄三線にて沖縄民謡『豊年音頭』を演奏しながら入場。）

ハイサイ グスーヨー チューウガナビラ。（こんにちは 皆さん、ごきげんいかがですか。）沖縄県那覇市出身の宮里と申します。私は、三線教室の主宰、演奏活動、ラジオパーソナリティー、フリーペーパーの編集発行など、様々な媒体で沖縄の魅力を発信しております。

沖縄の面積、距離、県域について

沖縄は小さな島国です。面積は約二二八一平方キロメートルで、香川県、大阪府、東京都についで四番目に小さい県です。

続いて距離について。神田外語大学のある千葉県の県庁所在地千葉市から、沖縄県の県庁所在地那覇市まで、一五七八・三キロメートルあります（都道府県庁間の距離・国土地理院データより）。この数字はどれくらいの距離かピンと来ないので、東京と大阪との距離と比べてみましょう。東京―大阪間の直線距離は、三九五・九キロメートルですので、約四倍も遠いところに沖縄は存在していることがわかります。

そして沖縄の県域について。東西約一〇〇〇キロ、南北約四〇〇キロにもなる広大な海域に、大小一六〇余りの島々が点在し沖縄県を形成しています。この範囲は本州の三分の二に相当する広さになります。「小さいけれども広い」それが沖縄です（図1）。

沖縄はご存知の通り人気のリゾート地として、日本をはじ

め各国から観光客が訪れています。あの国際的なリゾート地ハワイと入域観光客数が同水準で競り合うほど沖縄観光は堅調です。二〇一七年（一～一二月）の入域観光客数が前年比七八万三一〇〇人（九・二％）増の九三九万六二〇〇人となり、五年連続で過去最高を更新しました。二〇一八年は更に記録を更新し、目標としている一〇〇〇万人を突破しているかもしれません。

観光地としての魅力は、世界一サンゴの種類が豊富な美しい海、北緯二七度の奇跡の森と呼ばれ世界的に見ても希少な「やんばるの森」など豊かな自然にあるのはもちろんですが、琉球王国として育んできた独自の歴史と文化に依るところも大きいかと思います。

琉球王国は、一四二九年から一八七九年の四五〇年間、琉球諸島を中心に存在した王国です。資源の乏しい小さな島国でしたが、東アジアの中で存在感を放つ王国でした。沖縄本島を中心に同心円状に円を描くと、沖縄は東アジアの中で、

宮里氏

図 1：沖縄位置図

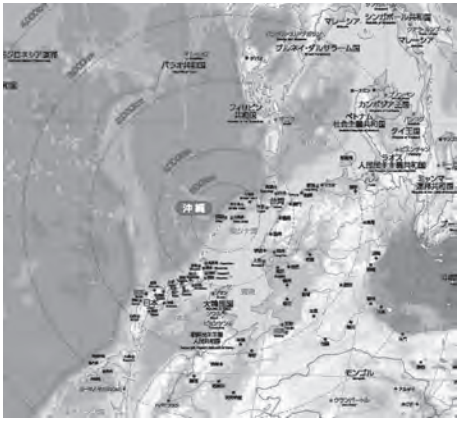

図 2：
沖縄を中心とした東アジア、東南アジアの地図

日本、中国、東南アジアと絶妙な位置関係にあることに気づきます。半径五〇〇キロメートルでは、九州にもたどり着けません。東京まで行くには一五〇〇キロメートル以上まで円を広げなければなりませんが、この同程度の範囲だとソウル、北京、東南アジアのマニラまで入ります。東アジアの中心に位置する琉球王国は、この地理的優位性をもとにバランス感覚に富む交易を展開しました（図2）。

交易により栄えた琉球王国には、朝貢貿易の相手国中国からの使者も訪れました。その大切な使者へのもてなしの宴などで披露されるために磨かれていったのが、琉球の芸能です。

三線について

私が演奏している三線は、琉球の宮廷音楽として使用されていた楽器です。中国の三弦（サンシェン）という三線よりもひと回り大きな楽器を起源としていて、一四世紀末には琉球に持ち込まれていたようです。

三線の特徴は胴に張られた蛇皮にあるかと思います。三線に使われる蛇の種類をご存知でしょうか？「沖縄」、「蛇」と連想すると、ハブを思い浮かべるかと思いますが、ハブの皮ではありません。ハブでは三線の胴に張るには細くて足りませんので、大型のニシキヘビの皮を使用しています。しかし、ここで問題が発生します。昔も今も沖縄にはニシキヘビは生息していないのです。琉球王国の時代から東南アジアから輸入していたのです。三線のルーツは中国から。材料は東南アジアから。三線ひとつをとっても、琉球王国の交易範囲の広さを感じ取れます。ちなみに、この三線が一六世紀ごろに日本に伝わり三味線になりました。

三線音楽のもうひとつの特徴は琉球音階と呼ばれる独特の音階にあります。この音階は西洋音階のドレミファソラシドから、「レ」と「ラ」を抜いた「ド・ミ・ファ・ソ・シ・ド」の五音音階から成り立っています。

この音階をもとに、現代でも数多くの新しい沖縄民謡が生まれています。現代の日本で新しい民謡が生まれ続けている地域は他に見かけないのではないかと思います。大ヒットしたTHE BOOMの「島唄」も、新しい沖縄民謡と言えるかもしれません。中国や日本の文化に影響を受け琉球独自のものへと昇華させた三線音楽は、沖縄県民に愛され現代に引き継がれています。

沖縄の人が、三線をとても大事にしているという逸話はいくつもあります。日本では刀を飾る床の間に沖縄では三線を飾っているだとか。床の間に三線二挺を飾る「夫婦三線（ミートゥサンシン）」を持つ事は縁起が良いだとか。また沖縄戦の最中には、大事な三線の棹を持って逃げたという話もあります。（三線は、棹に価値があると言われています。）終戦直後、

何もかも焼けてしまい打ちひしがれていた中にでも、缶で胴を、弦はパラシュートの紐を材料にして「缶カラ三線」と呼ばれる粗末な三線を作り、奏で、唄うことで苦しい心を慰めていたそうです。私も沖縄を離れることで、故郷を懐かしく思い三線を始めました。沖縄の人と三線は、切っても切り離せないものなのかもしれません。

移民について

三線が切っても切り離せないと言えば、移民の方々もそうでしょう。沖縄は移民の多い県でもあります。一八八九年のハワイへの移民を皮切りに、一九〇五年には一六二〇人が移民として海外へ行き、二五年には二六〇六人、全国比で約二四％を占めるほどになりました。移民として海外へ出て行った背景には、当時の人々の暮らしの貧しさがありました。海外に新天地を求め、移民先から沖縄の身内に送金するなど夢見たのです。しかし移民先でも苦難の連続でした。与えられた仕事は辛いものでした。そこでも三線に慰められたという話を聞いたことがあります。

「浜千鳥」という唄があります。この唄の主人公は旅に出ていて粗末な宿に泊まることになりました。ホームシックになっているようで、遠くで鳴く鳥の声に望郷の念を覚えています。窓の外には大きなお月様が。

「渡海や　隔じゃみてぃん　照る月やふぃとぅち　あまん眺みゆら　今日ぬ空や」

（海を隔てていても　照る月はひとつ　あの方も眺めているだろう　今日の空を）

自分が眺めているあの月を、置いてきた大事なあの人も眺めているのかもしれないと思い、涙が頬をつたったのかもしれません。

移民先で、この「浜千鳥」の歌詞を自分の境遇に照らし合わせ唄っていた、という話を聞いたことがあります。「自分が眺めているあの月は、故郷沖縄も照らす月なのか」と。私も好きで、この唄をよく唄います。

移民の方々が渡った国々では、三線やエイサーが伝わり、とても大事に唄われています。「世界のウチナーンチュ大会」というイベントがあります。これは、海外移民など沖縄にルーツを持つ海外の沖縄県系人を招待して開催されるイベントで、一九九〇年に第一回が開催され二〇一六年には第六回大会が開催されました。

私も参加したことがあるのですが、顔はウチナーンチュなのに英語やスペイン語で話す彼らが、一たび三線を持ち唄うと、見事なウチナーグチ（沖縄の言葉）で唄いビックリし感動したことを覚えています。母国から離れることで心の拠り所である故郷の唄や芸能、言葉を子孫に残そうとする気持ちが

強まるものなのだと感じました。

沖縄の言語について

言葉の話が出ましたので、沖縄の言語についてのお話をさせていただきます。沖縄固有の言語を「ウチナーグチ」、「しまくとぅば」と呼んでいます。

冒頭で、沖縄の県域の話をしました。本州の三分の二にあたる広大な範囲が沖縄です。これだけ距離があると、同じ沖縄といえど言葉が通じないほど違ってきます。

例えば、「ありがとう」を、私の出身地の沖縄語では「ニフェーデービル」と言いますが、これが宮古語では「タンディガァータンディ」、八重山語では「ミーファイユー」となります。全く違います。ですので民謡も、沖縄民謡、宮古民謡、八重山民謡と区別されます。それぞれ言葉も違えば、島民の気風も違います。習得の難しいところでもあります。

この「しまくとぅば」が、いま消滅の危機に瀕しています。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は二〇〇九年、しまくとぅばを消滅の危機に瀕する言語に指定しました。指定されたのは、

【重大な危機】　八重山語（八重山方言）、与那国語（与那国方言）

【危険】　国頭語（国頭方言）、沖縄語（沖縄方言）、宮古語（宮古方言）

の、五言語です。

明治末から戦前まで「方言札」というものがありました。「標準語」を使わせるために、学校で方言を使った生徒の首にこの方言札を下げさせました。このような「標準語励行運動」を通して、しまくとぅばを話す人々は次第に少なくなっていきました。一六年度の県民意識調査（二六三〇人が回答）によると、しまくとぅばを「まったく使わない」「あまり使わない」「あいさつ程度」と答えた割合は合わせて七二・一％だったそうです。かく言う私も、ほとんどしまくとぅばを話せません。沖縄民謡を唄っている身からすると、とても残念な状態です。

言葉は、その土地に住む人々のアイデンティティだと思います。その土地に住むからこそ生まれた言葉、訳することが難しい言葉もあります。しまくとぅばが失われるときは、ウチナーンチュのアイデンティティも失うと言っても過言ではないかもしれません。

沖縄県はこの現状を打開したいと動いています。二〇〇六年に九月一八日を「しまくとぅばの日」に制定し、二〇一七年には沖縄県文化振興課が県庁内に「しまくとぅば普及センター」を開設するなど活動しています。私も少しずつでも勉強していきたいと思っています。

メディアについて

私は、三線教室の主宰、演奏活動だけでなく、コミュニティ局でのラジオ番組のパーソナリティ、そしてフリーペーパーの編集発行までしています。

二〇一二年に三線教室を始めるにあたり、自分の存在を知ってもらうために発信をしていかなければと考えたからです。以前からSNSには力を入れていました。ブログは二〇一八年に開設から五〇〇〇日を超えました。ほぼ毎日更新しています。毎日四〇〇～五〇〇アクセスがあります。おかげで、「三線教室」と検索すると上位に掲載されます。このブログは無料のサイトを使っています。毎日更新しているだけです。

フリーペーパー『ハイサイ！ウチナ～タイム！』

ラジオはコミュニティ局ですが、インターネットで世界中で聴取できます。ハワイからメッセージが届いたこともあります。毎週水曜日の一時間番組で、七年目です。フリーペーパーは、一人で編集、発行、発送まで行っています。現在、東京・神奈川・沖縄を中心に、約三〇〇ヶ所に配布しています。あとは、沖縄へ修学旅行に行く本土の中学、高校に出向き修学旅行の事前学習会などの講演活動もしています。

これらはバラバラではなく、すべて「沖縄」ということで共通です。一つのことだけでなく、それぞれの活動が相乗効果を生んでいます。ご縁を呼び込む力は、このマルチワークにあると思っています。私はイノベーションとは、まったく新しいものを作り出すことではなく、いまあるものの組合せで作り出すものだと解釈しています。

三線の演奏家はたくさんいます。三線の演奏家でラジオ番組をやっている人間も結構います。しかし、フリーペーパーまで編集発行しているのはおそらく私だけです。突き抜けた才能はなくても組合せ次第でオンリーワンになれるわけです。まだまだ私の肩書きは、増えるかもしれません。

最後に

最後に沖縄の言葉で締めくくりたいと思います。沖縄の格

言を「黄金言葉（くがにくとぅば）」と言います。

「いちゃりばちょーでー」という言葉があります。「いちゃりば」は「出会えば」、「ちょーでー」が「兄弟」です。「縁があって出会っているから、兄弟のように仲良く付き合いましょう」という意味です。これが沖縄の人々のマインドです。小さな琉球王国が、東アジアの国々の中で栄えることができたのは、このマインドにもあったように思います。コミュニケーションの要のように思います。

〔宮里氏、唄三線にて沖縄民謡『唐船どーい』を演奏、会場の手拍子とともに終了。〕

宮里氏による唄三線の演奏

司会の豊田先生